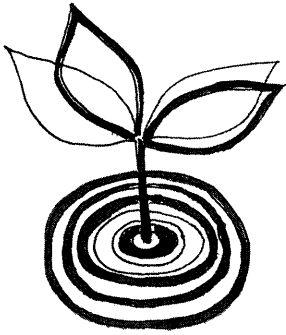


ることを、たいへんありがたく幸せなこととくみしめて  
いる。

昨今はまた、国民にとっての天皇制についての議論が  
盛んで、戦争責任論も往きかっているが、四十数年前、  
戦争にむかっていた時代に、良心的な保育者が、どのよ  
うにして芽達を守り、どのような苦しみの中で子供達の  
未来の姿を見通していかれたのだろうか、というような  
ことを、今に生きる私達は知る努力をしなくてはならな  
いように思う。真に芽を愛でる人になるためには、社会  
に対して、歴史の過去・未来に対しても、よく見きわ  
めながら、芽達を守り育てる社会的な役割も担っていけ  
るようではなくてはならないと自戒している。



こあいさつ

この五月号が皆様に読まれている頃、私はオ  
ランダ、アムステルダム郊外アムステルフェ  
ーンで、夫と娘と三人で新しい土地での毎日を  
緊張の中で始めていることでしょう。

「暗い森の中をお母さんと手をつないで歩い  
ている夢を見たよ。やさしい男の人の声が『も  
うすぐオランダだよ。』って教えてくれるの。」  
娘みづぎの話です。オランダで小学一年生を迎  
える期待と不安でいっぱい娘との生活も報告  
したく思っております。

わずか一年三か月しか「幼児の教育」編集に  
携われませんでした、当誌を愛していられし  
やる多くの方々と接することができ、幸せな日  
々でした。長い歴史を持つこの「幼児の教育」  
誌が、今後とも多くの読者に支えられ、より発  
展なさることを、心よりお祈り申し上げます。

向山陽子